

大学

成人・就労

大学全入時代、発達障害の学生のサポートが話題に（大学）

大学全入時代を迎え、大学も発達障害の学生をどうサポートするかが学生保健管理センターのトピックスになりつつある。教育プログラムにどう支援するかを具体的に組み、文科省も大学も注目している。問題なのは小・中学校では特別支援教育に熱心だが、大学には特別支援教育の専門家が少ないこと。私の大学でも看護科の実習で壁にぶちあたり、次に進めなくなったケースがある。うちの大学には親の会をサポートする使命があると思う。シアトルの大学が進めているように、これからは親の会のサポートなど地域貢献を積極的にやっていくことが大事である。

担当の先生に相談し音楽の道に（大学）

私の知っている音楽の道に進んだ学生は、執行機能が弱く、単位がとれない、実習でなかなかうまくいかない担当の先生に相談し苦手な部分のフォローがしてもらえた。保健管理センターは十分把握していなかったため、直接担当の先生に相談して良かった。



高等学校

大学生の相談で「親に内緒に」「就職の支援を」（発達障害者支援センター「ウィッシュ」）

大学生の相談を受けている。共通するのは「親に内緒にしてほしい」「就職の支援がほしい」ということ。情報の共有が大事で、日々の記録は見せないが、支援計画は本人にも見せている。中学生等で自分の診断名が分かっている人には見ていただく場合がある。中学卒業後、在宅の方の居場所の支援など保護者の理解と協力が必要。キーパーソンとなる方の理解は重要で親御さんと一緒に話し合う必要がある。

中学校からの情報が役立ち、生徒を救った。本校の現実をしっかりと見てほしい。（高等学校）

高等学校での特別支援教育の取組は始まったばかりだが、本校定時制は特に急ぐ必要がある。本校の在籍生にも支援の必要がある生徒がいる。中学校と高等学校の情報交換ができる場として中高連絡会が2回あるが、形式的な会という感否めない。発達障害が理由で合否に影響することはなく、実際に発達障害と診断された生徒もいる。本校に入って受診を了解されたケースもある。ある生徒は入学時から心配していたが、中学校からの「こういう時にはこう支援すると良い」という記録が指導に役立ち、昨日も頑張って英語の授業を受けた。もし、その記録がなかったら適切な支援はできなかっただろう。願書の副申書では遅い。もっと早く個別の相談を持ちかけてほしい。入学当初から本校での学習になじめない生徒もおり、中学校の進路指導と密に連携をとっていく必要がある。本校の生徒は学校が好きで、存在意義は大きい。平成22年に宍道に独立校ができるが、『働きながら学ぶ』という状況が変化してきている面もあるため、社会状況に合った生徒の進路先として施設やスタッフを配置してほしいと願っている。

進路最終決定時期の問題と「本当に受け入れてくれるか」という不安（中学校）

高校側からは早く教えてほしいということがあるが、最終的な進路が決定してからということもあって、どうしても直前になってしまうという現実がある。高校側が生徒の進路を開いていただいているのはありがたい。ただ、現場からすると本当に受け入れてくれるのかという不安はあると思う。

中学校

高校の校長も保育所を見学。卒後を見据えて一貫した支援（小学校）

飯南町では保育所から高等学校までの一貫した支援を基本に小中連携をしてきた。今年度は高等学校長に入っただき、保育所の様子も見てもらっている。高等学校にも支援の必要な生徒がいるが、卒業後を見据え、手厚く進めてもらっている。課題としては、実際に見て話をするのに加え、記録として残していくこと。教員も異動するので、どのようにしていけばいいかを考え、統一して目に見えるものにしたい。また、この会も今後は校長から実務担当者に移していきたい。

『木次の教育を語る会』に保健師が参加。早期の情報を担当者間で共有することが大事。（中学校）

『教育を語る会』を紹介したい。木次中校区では保・幼、小、中の校・園長が参加し連携を図っている。子どもの育ちをテーマに平成19年度から特別支援教育も含めた検討会議でそれぞれ情報を共有し、必要な支援を考え合うことになった。第1回を12月に開催する際大事にしたのは、保健師に参加してもらい、早期からの情報を担当者間で共有すること。具体的な話の中で、子どもの記録をとり方など考え方の違いが明確になった。話題の『個別の教育支援計画』、『個別の指導計画』など共通したものがないか様式を持ち出して話し合うことになった。斐川町の取組や県や国の分も参考にし教育委員会と連携して進めたい。課題は高校との連携。発達障害のある生徒の情報を高校にどう伝えるか考えたい。また、保護者の会が弱いので、保護者の組織的なつながりを大切にしたい。

ひろがるネット

第2回広域特別支援連携協議会開催される 平成20年1月31日(木)午後～ 出雲合同庁舎

連携がつながり、保・幼、小、中、高に裾野がひろがる 5市町全てで協議会が開催され、巡回相談の体制が整備される



保護者の基調提案をもとに、高等学校や大学、就労へのつなぎまで話題が広がる

2回目の協議会が開催され、江角会長の進行により、委員からの活発な意見が交わされました。

2名の保護者の意見を基調提案とし、市町の保・幼、小、中で取組の成果や課題を出し合いました。そして、今回は高等学校からモリアルな報告や問題提起があり、大学への引継ぎや就労まで話題が及びました。昨年の「就学前のつなぎ」に加え、「中・高卒業後のつなぎ」が中心テーマになりました。

全ての市町教委単位で連携協議会が開催され、それぞれの実態に応じた研修や相談が行われる

また、今年度は全ての市町教育委員会単位で特別支援連携協議会が開催されました。

奥出雲町では今年度8月に連携協議会がスタートし、12月の巡回相談員会議で幼稚園等の巡回相談を進めるシステムをスタートさせました。「現場の熱意ある先生方が町教委の後押しをしてくださった」と発表がありました。

飯南町では、相談支援チーム会議が連携協議会を兼ねる形で開催され、教育委員会が事務局として調整にあたることとなりました。

雲南市では、福祉部と教育委員会が一緒になって保育所と幼稚園の情報を共有し合う会議を進め、さっそく出雲養護学校の力を借り、全ての保育所や幼稚園の巡回相談を実施されました。

出雲市では、わくわく相談会や通常学級担任対象の特別支援教育に係る研修会、市のサポーター対象の研修会等を実施され着実に成果を上げています。

斐川町が「個別の教育支援計画」検討委員会で様式と手引を作成。平成20年度から活用開始。

斐川町の連携協議会では「個別の教育支援計画」について話し合わせ、後日、2つの中学校区の保・幼、小、中、通級の代表で検討委員会を重ね、教育委員会の原案をもとに様式と手引が作成されました。小さな町ならではの『顔の見える関係』を大事にし、関係機関連携の知恵を出し合っています。

出雲市でも移行支援計画等の準備が進んでおり、これらは今後、他の市町の参考となりそうです。

『システムは人が動かす』...人が変わっても動く組織と継続的な研修を（江角会長のまとめより）

「各市町とも財政的に厳しい中で動いていただき、良い方向に進んでいます。担当者が異動してもシステムとしてきちんと引き継がれるように整備することが大事だと思います。しかし、反面、『システムは人が動かす』ので今後どう研修するかが大切です。保護者のニーズに応えられるように研修を重ね、関係機関と連携し丁寧に実践を重ねていきたいものです。」

6回の開催で広がった裾野と5市町の協議会組織 この共有の財産を次に生かして(所長あいさつから)

「通算6回目の本協議会は、現状を出し合い、ニーズにどう対応するか本音で語る貴重な場となりました。

17年度発足当時、学校からの委員は養護学校長と小学校長のみでした。6回の開催で、保・幼、小、中、高校まで裾野を広げ、5市町全てで連携協議会の組織も立ち上がりました。今後も実践を重ね、この成果を共有の財産として広げていただきたいと思います。」

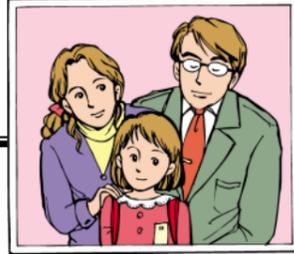
幼稚園・保育所

サポーターと担任をつなぐ支援計画表を小学校の引継ぎに活用(幼稚園)

通級指導教室に通う子どもの状況について早期に保護者の願いを聞き、担当の先生に意見を言えば良かったと思う事例があった。今後、通級への人的配置も併せてお願いしたい。出雲市教委は細かくサポーターを配置していただき、助かっている。4～5時間の勤務で放課後の打合せができず、園長、教頭が各サポーターの悩みを聞いたが難しかった。月別の支援計画表の様式を作成したので今後小学校との引継ぎに活用したい。

福祉・教育連携を基盤に『個別の教育支援計画』で早期のつなぎ(保育所)

斐川町の場合、福祉課の保健師と支援の必要な子について連絡を取り合い連携ができているように思う。また、3歳くらいから診断がつく場合もあると思うが、診断はなくても2歳くらいから気になる子は出てくるので、記録を取って上につなげていく必要がある。斐川保育協議会としても、斐川町でまとめられた『個別の教育支援計画』の様式をもとに4月から一緒に活用していきたい。



医療・福祉

医療側も支援者をつなぐ意識を持ちたい(医療)

就学前に明らかに発達障害があって、相談機関等を利用している保護者は理解が進んでいる。病院の診断だけでなく支援できる機関を紹介している。発達障害の場合は、支援が必要になった時点から支援者同士をつないでいく意識が医療側にも必要であり、家族の思いを最大限尊重しながら伝えている。

出産後第一歩の支援と調整役を(出雲保健所)

保健所では病院から帰られた子どもの在宅支援と支援者の調整役をしている。当然子どもや家族の状況は変化するので、ご家族を中心とした情報交換が必要。教育の分野で体制を作っていただき、ありがたい。出産後、第一歩の支援ができるよう、また、その後も継続し相談に応じていけるようにしたい。

小学校

子どもの状況を固定化してとらえず、長いスパンで情報伝達(小学校)

組織づくりに併せて教員の力量をどう高めるかがカギ。まず、校長が取組の見通しを持ちたい。子どもへの対応も重要だが、保護者対応でうまくいかないことがある。子どもの指導、支える人の研修を長期的に継続することが必要。また、移行時の支援計画は形も大切だが、まずは作成し、修正を加えていきたい。今まで個人情報の関係で伝えることを遠慮したが、子どもの「困っていることの伝え合い」を最優先したい。状況は変化するので、固定化してとらえず、長期的に支援したい。すでにファイルを作っている幼稚園の伝え合いから始めたい。

保護者の願いをつなぐ教員の力量を高めたい(小学校)

教員の力量をどう高めていけばいいか考えていた。今、病弱の特別支援学級を担当し、保護者と話しているが、どう中学校につないでいけばよいかと思う。奥出雲町でも、最近は支援の必要な児童が増えており、『個別の教育支援計画』が課題。肢体不自由の子が大学に通っている。地元の小、中、高等学校で早めに話したお陰で施設面で配慮してもらえた。早めの相談が何より大切と思う。

子ども・保護者

支援を受けるには私たち保護者がまわりに情報を伝えることがスタート(保護者)

我が子は特別支援学校高等部で重度の重複障害がある。地域で育てたいという願いで地元の養護学校に就学。兄弟の通う小学校との交流学习で一步を踏み出す勇気ももらった。学習発表会で交流を取り上げていただき、地域の方に温かい声をかけていただいた。その中で、支援を受けるには保護者がまわりに情報をきちんと伝えることが大切と思った。2年前に比べ、連携機関が増え、食事介助の先生方、外部専門家による『摂食指導』、訪問入浴や学校の送迎等利用している。今後は、校舎の老朽化と児童生徒の増加に伴う設備の充実、教員の専門性の向上、人的配置数の増加をお願いしたい。また、障害の重度重複化に伴い、理学・作業療法士、言語聴覚士の専門家の配置、本校のPTA活動、地域の小中学校との連携も必要。この春、高3で、卒後に向け『地域ボランティアの養成』を考えている。また、在宅で必要な医療的措置の知識を得たい。成長に伴い体の変形等が表れ、心肺機能や命を守るため、私たち家族は、親亡き後の支援体制を考えなければならず、兄弟や家族の精神的サポートが必要。我が子が良い表情で過ごせるよう今後も連携をとり明日につなげたい。

親が涙を流さなくても、世の中に巣立っていくことができるような社会に(保護者)

小学校で校内通級を利用した。当時は中学校の通級指導教室がなかったので小学校の通級担当から中学校の先生に伝えていただいた。おかげで3年間楽しく生活し、得意の陸上を頑張った。高校でも小学校の通級担当が中3担任と一緒に伝えてくださった。高校では学習障害の研修会に参加された理解のある担任の温かいクラスで過ごせた。小学校の通級担当に高校まで情報をつないでもらえた。これから大学に行くが、学習障害を伝えるか悩む。学習障害は目に見えず、女の子で友だちからの目が気になり、葛藤もある。また、他の通級指導教室に通う学習障害と吃音がある子が、中学校で環境が変わりいじめを受け、担当の先生からもっと早く支援を受ければ良かったと言われた。支援を受ければ伸びる子はたくさんいる。これからは、親が涙を流さなくても、頑張らなくても、世の中に巣立っていくことができる社会になるといい。幼児の通級が身近で回数多く受けられる体制。担当の先生の増員。先生方の医療との連携や障害への理解。余暇を過せる場や身近で継続して相談できる場がほしい。まわりの方にわかりにくい発達障害への理解と支援が進めばと思う。

5つの市町で特別支援連携協議会と相談体制が整備

～子どもの育ち、保護者の悩みをネットワークで支える～

さまざまな取組でできたネットワークを生かし、日々の地道な実践を継続(出雲市)

平成17年度に特別支援教育推進委員会を設置し、『わくわく相談会』を始めた。今年度の相談はすでに40件。委員の助言を学校に返すサイクルにしたい。コーディネーター研修会に加え、『発達障害児理解のための研修会』を通常の学級担任対象に行った。出雲市・養護学校相談事業連絡会を出雲養護学校の提案で立ち上げた。昨年度は就学前の相談窓口パンフレットを作成した。『支援ファイル』を今後は高卒後就労までつなげたい。小中一貫教育で市特別支援教育推進委員が特別支援教育部に入り各中学校区特別支援推進委員会を設置し、小中個別支援計画を作成する予定。補助ヘルパー事業で支援にあたっていただいている。校内体制は100%、巡回相談や関係機関との連携もほとんどの学校が行い、個別の指導計画も7～8割の学校で作成している。個別の教育支援計画はこれから。ネットワーク体制は整ったが、最終的には日々の地道な現場の実践が大切である。

保育所・幼稚園の巡回相談で教育委員会と福祉部との連携が図れてきた(雲南市)

3回の研修会のうち、通常の学級の教員対象に現場で役立つ研修を行った。出雲養護学校から相談支援チームに参加してもらい、相談が充実した。幼稚園で学期に1回巡回相談を行った。今までできなかった保育所への巡回相談も保健師と出雲養護学校の巡回相談員で行った。今まで見過ごされていた気になる子をいかに支援につなげるか、保育者と保護者の意識の違いをどう解決していくかが課題。福祉部と教育委員会と管轄が違うので、発達クリニックの情報が幼稚園や小学校に上がらなかったが「総合的な窓口」で情報を共有することでまとまった。相談体制が整い、幼稚園、保育所での具体的な支援や連絡会の方法につなげたい。今後は中学校を中心とした連携が必要。特に木次中校区はモデルとなる取組。中学校区の情報交換会はまだまだ十分でない。また、養護教諭の会が今後活発になるよう、保健師からも情報発信したい。

熱心な先生方の後押しで町連携協議会と巡回相談のシステムが(奥出雲町)

特別支援連携協議会が今年立ち上がった。町内の各種団体、個人が集い、特別支援体制についての講義で認識を深め、情報交換を行った。12月4日に巡回相談及び窓口に係る打合せを行い、特別支援教育に熱心な先生方が後押しをする形で巡回相談のシステムができた。5名の先生方が巡回相談員となり、それぞれ連絡をとりながら進め、大きく前進した。すでに町内の幼稚園で巡回相談が行われている。巡回相談を行う組織ができ、情報の共有化が図れたことが大きな成果。小さい時に見過ごされがちだった保育所や幼稚園から相談の要請が出るようになり、成果が上がっている。5名の相談員は校務多忙であり、校内の理解を得てもらえるようさらに働きかけたい。また、町に専任の職員を置くことが必要ではないか。保護者が気軽に相談できるような雰囲気づくりも心がけたい。

小規模な町で保育所から高校の支援体制のパイプを太く密に(飯南町)

19年3月に連携協議会を兼ねた『特別支援相談チーム』を開催し、組織や内容を考えた。行政職員の意識を高めるための研修も行った。巡回相談は町内5校で16回。昨年に比べかなり回数が増え学校ぐるみの対応をしていただいている。コーディネーター研修や保小連絡会、情報交換を行った。チームの立ち上げで支援体制の基盤が整った。小規模な本町で保育所から高校まで過ごす確率が高いので、この利点を生かし、パイプを太く密にし、一人一人を大切にしたい。行政職員の意識高揚が図られ、巡回相談や保護者との相談など機会の充実が図られたのも成果。今後は特別支援相談チームの連携強化と役割の明確化。保護者や住民理解の手だて。町内で核となる指導者や人材の育成。特別支援サポーターの研修の場が課題である。

『個別の教育支援計画』の様式と手引を20年度から作成・活用(斐川町)

通級指導教室等との連絡会議で教育委員会と健康福祉部で情報を共有している。保護者参加の就学相談会を「いちごの会」主催で実施した。斐川町特別支援連携協議会を5月と12月の2回行い、特別支援教育コーディネーターを中心に校区别的情報交換を行った。3月に3回目の開催を予定している。これまで1年間の就学指導の流れが全体に共有できなかったが、1つに体系化して自分たちがどう動けばいいか第1回連携協議会で説明した。また、小中学校で個別の教育支援計画の様式がばらばらだったので保・幼、小、中の代表委員で検討委員会を重ね、ほぼ終わった。平成20年度から支援計画を作成し、活用したい。斐川町には高校がなく、多くの中学生が出雲へ進学するが、中学校から高校への連携が課題だと思う。これからは教育委員会が推進役となって進めていきたい。